

函館新外環状道路環境検討懇談会



第6回懇談会資料



平成22年3月15日
北海道開発局 函館開発建設部

昨年までの懇談会の流れ

1

H
20

基本方針、配慮方針の検討

基本方針、配慮方針の確定

H
21

道路の設計に更なる調査が必要な区間 (= 亀田川湿地部)

調査実施
(NPOの協力により実施)

構造検討

構造決定

道路の設計を進めることができる区間 (= 亀田川湿地部以外)

道路設計

用地買収

施工計画の作成

施工開始

H
21

【議事】

1. 第6回懇談会の協議事項

- ・ 道路の設計に更なる調査が必要な区間の報告（亀田川湿地部）

2. 今後のスケジュール

道路の設計に更なる調査が必要な区間の報告（亀田川湿地部） 調査の実施背景

追加調査の視点

- ・市民に親しまれている湿地環境の保全の必要性について再確認が必要

調査の内容（平成21年6月調査）

- ・底生動物など新たに配慮すべき種の再確認調査
- ・身近な湿地環境として市民の鑑賞対象となっているミズバショウの分布調査

調査結果

底生動物

水路部の調査では、ニホンザリガニなどの配慮対象種は確認されなかった。

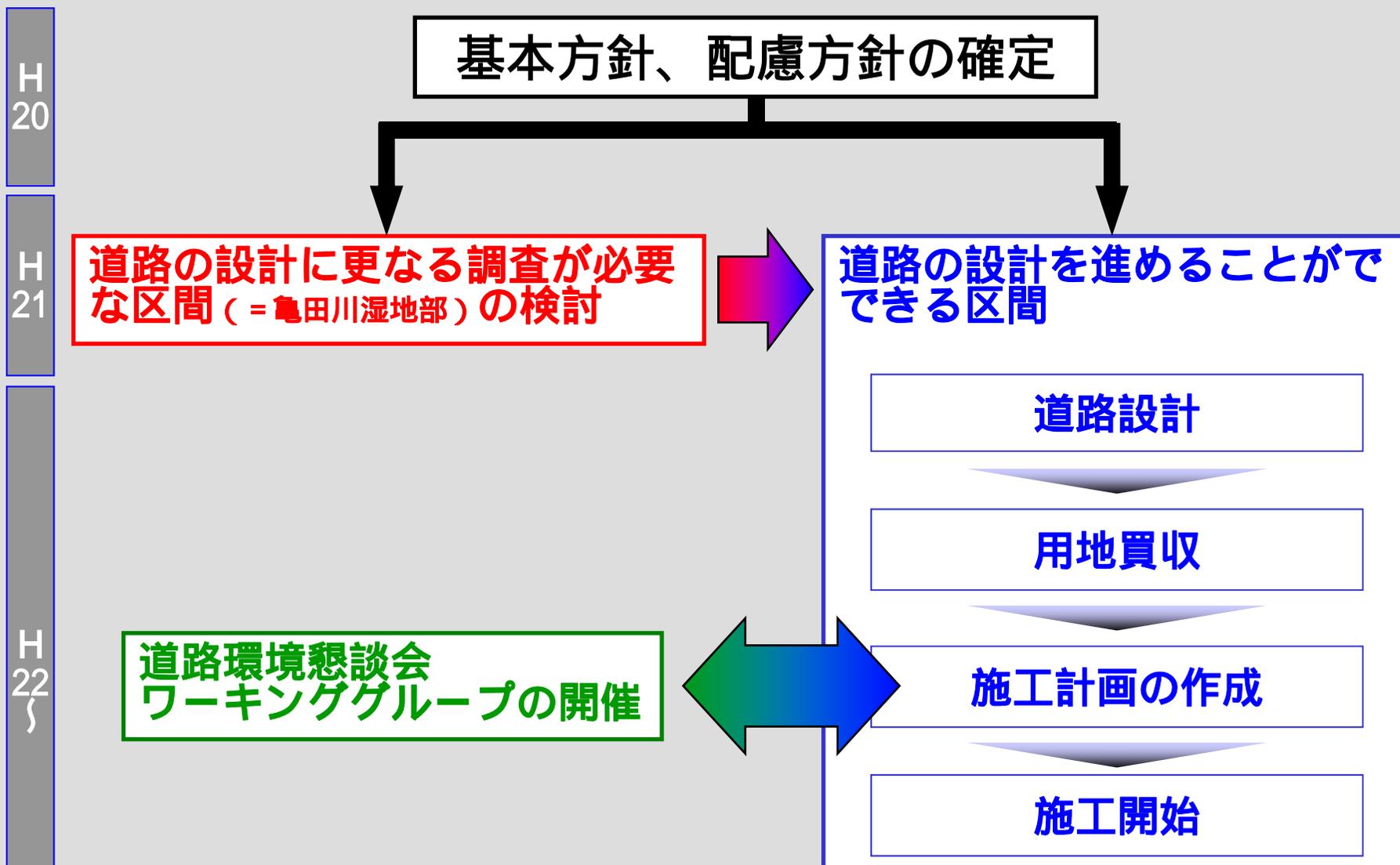
植物

ミズバショウの生育状況および分布状況について確認した。

丘陵部の際を流れる水路に沿って繁茂しており、計画路線の北側に多く分布している。

道路構造の比較検討

道路構造		盛土構造	橋梁構造
対策の概要		道路と水路が交差する部分を盛土とし、水供給源を確保するため、水路の切替、通水管および透水層を設置する構造	道路と水路が交差する部分を橋梁とし、水供給源を確保するため、水路の切替をおこない、橋梁下を通過させる構造
指摘 アセス	ホタル 保全	水量の確保、夜間の光環境対策を講じることにより、生息環境が保全されるため、主要なホタル生息地への影響は極めて小さい。	水量の確保、夜間の光環境対策を講じることにより、生息環境が保全されるため、主要なホタル生息地への影響は極めて小さい。
懇談会 指摘	身近な 湿地環境 (ミズバショウ)	橋梁構造に比べ、地形の改変面積が大きいことから、ミズバショウの消失する面積は広い。なお、地形改変せずに残存する道路北側の生育環境に対しては、ダムアップ方式などを導入することで、生育環境の保全を図る。	盛土構造に比べ、地形の改変面積が小さいことから、ミズバショウの消失する面積は少ない。
景観など		市民が利用している亀田川右岸通路の通行機能は確保可能。 橋梁構造に比べて見通しは悪いが、構造物は目立 ない。 盛土法面の緑化を、道路周辺の植生との連続性に配 慮した樹種構成とすることにより、生物の生息、生 育環境の連続性を確保可能。	市民が利用している亀田川右岸通路の通行機能は確 保可能。 盛土構造に比べて見通しは良いが、橋脚および橋桁 による構造となることから、鉄およびコンクリート 構造物が目立つ。 橋梁桁下空間は、現在の自然環境から大きく変わら ずに、生物の生息、生育環境の連続性を確保可能。
評 価		橋梁構造に比べ、地形の改変面積が大きいことから、ミズバショウの消失する面積は広い。 しかし、工事費については橋梁構造よりも安価である。 さらに道路北側の生育地に対しては、ダムアップ方式などを導入することで、生育環境の保全を図る。	盛土構造に比べ、地形の改変面積が小さいことから、ミズバショウの消失する面積は少ない。 しかし、工事費が盛土構造に比べて非常に高価である。



H22以降、配慮方針に従って道路設計を順次実施し、施工計画を作成し工事着手の目途が立った段階で、事前に環境検討懇談会等を開催し、設計内容について適宜確認し必要な助言を得る。